みんなで話そう！つり場のマナー@湘南大堤防（2019 年）
実施報告（2019.11.13 版）

明治大学専門職大学院
ガバナンス研究科　専任教授
松浦正浩
mmatsuura@meiji.ac.jp

１．背景と目的

１）背景

・ゴミ放置、迷惑駐車、事故等が理由で立入禁止、釣り禁止になる釣り場が存在
・すべての釣り人が誰にも迷惑をかけないことが、持続可能な釣り場の確保に必要
・法律や条例によるルールも重要だが、釣り人が自主的に守る「マナー」も重要
・「マナー」を守ってもらうためには、釣り人全員の納得感・自分ごと感が重要

２）目的

・釣り人どうしの対話を通じて、釣り人自身が納得できる「マナー」を明文化

２．イベントの詳細

１）会場

湘南大堤防（神奈川県藤沢市江の島２丁目）　（図１）

２）実施日時

2019 年 10 月５日（土）　10:00～11:00　（快晴）
（※日本釣振興会さまの水中清掃と同時開催）

３）主催者等

主催：明治大学専門職大学院ガバナンス研究科松浦研究室
協力：（公財）日本釣振興会、明治大学漁業組合（学生サークル）

４）募集方法

水中清掃の案内と同時にチラシを配布し案内　（図２）
参加者にはレジャーシートを配布（日本釣振興会さまご提供）

図１：会場のようす

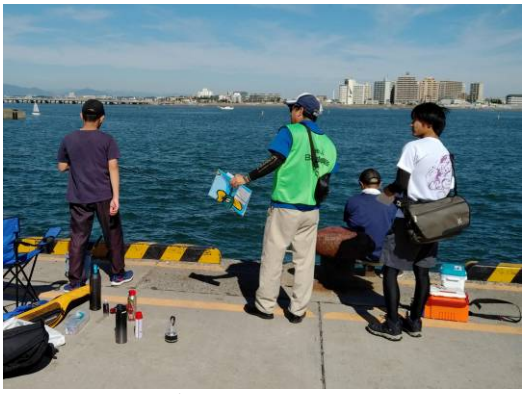
図２：参加者募集のようす

３．参加者

一般釣り人７名（初心者３名、ベテラン〔経験 30～60 年〕４名）
釣り頻度：毎日～年２回、江の島常連２名
釣り方：サビキ４、ウキ３、投げ３、船・ボート２
（※うち、子連れのファミリー３組）
２グループに分かれて対話

表１：参加者の釣り経験（アンケートより）

ID	経験年数	頻度		江ノ島頻度		釣り方
		年／月	回	年／月	回	
1	0	年	5	年	2	サビキ
2	0	年	2	年	0	投げ、船・ボート
3	1	年	5	N.A.		投げ、サビキ
4	30	月	10	月	10	ウキ、サビキ
5	35	年	25	年	2	投げ、ウキ、サビキ、ルアー
6	52	年	5	過去）	1	船・ボート釣り
7	60	月	30	月	30	ウキ

４．対話で出てきたマナーに関する意見の概要

【現在感じている主なマナー問題】

１）ゴミ
- 釣り糸、コンビニ弁当のゴミ放置
- 夜釣り明けに特に問題
- 風で飛ばされた椅子等が海中に落下
- コマセの汚れ放置
- 漁網、ロープに根掛かり

２）管理、ルール
- つり場のゆずりあい不足（一人で広いスペースを使用）
  - 多数の竿を置き竿
  - あいさつ不足
- つり場の常時占拠
  - 椅子等放置で常時場所取り
  - ピトン、へら台の放置
- つり場のルールが不明瞭
  - つりをしてもよい場所
  - 許される釣り方
  - 管理者

３）釣り方
- 隣のつり人の前に投げる
- 流れるウキ等を放置
- 地形を考慮しない釣り方
  - 根掛かり多発地帯で投げ釣り
  - 潮通しの悪い場所で撒き餌大量散布

４）安全
・ライフジャケット未着用
・浮環、はしご等の施設側での対策不足
・危険魚の扱い
・子供の行動への注意不足（放置）
５）環境問題
・水温上昇、生態系・海底地形の変化とそれに伴う魚種の変化
・外来種の増加
６）釣り人の意識
・つり場は自分のものという意識
・自分だけ釣れればよいという意識
７）その他
・日本釣振興会の存在、清掃活動をはじめて知った

【今後あるべき方向性】
１）ゴミ
・椅子やゴミが飛ばされないように注意する
・ゴミは基本、持ち帰る
・他人のゴミも回収して持ち帰る
２）安全
・自分の身を守るためにライフジャケットを着用する
・子供の安全に特に注意する
・危険な場所には立ち入らない
３）環境保全
・次世代が楽しめる環境を残すことを意識する
４）釣り人の意識
・自分だけでなく、誰もが気持ちよく釣りができることを意識する

図３：対話の様子（グループ１）

図４：対話の様子（グループ２）

５．今後のつり場のマナー啓発のポイント

今回の対話結果を踏まえ、以下の方策が考えられる。

・意図的なゴミ放置に加え、意図しないゴミ（風、根掛かり）にも注意喚起
・陸上でもライフジャケット着用等の安全対策をより強く勧奨
・ファミリーフィッシングについて、親が子供に注意を払う必要性を注意喚起
・環境問題を契機とした釣り（のマナー）への関心惹起策の検討
・釣り人の意識改革・行動変容の手段の検討
・日本釣振興会等諸団体による清掃等の活動実績のさらなる広報
・迷惑な釣り方（投げ方、過剰な場所取り等）についても注意喚起
・つり場のルール（ガバナンス）の明文化
　・グレーゾーンでは対応できなくなってきた現実への対応
　・行政（国交省、水産庁）等との連携

６．今後のつり場のマナーに関する対話イベント等への知見

今回の経験を踏まえ、以下の方策が考えられる

・インターネットモニター等を利用したマナーに関する意見の収集
・雑誌メディア等で一般公募した釣り人による対話の実施
・各都道府県の海面利用協議会におけるマナーに関する議論の整理・共有
・各釣り文化振興モデル港に関する協議会の議論の整理・共有
・釣り人、漁業者、釣具屋等ステークホルダーによる議論の場の設置

７．各ファシリテーターのコメント

【黒崎晋司】
・レジャーを楽しむ人たちに対して、その場で参加をお願いするＷＳは、参加者集めがまずはクリアすべき第一関門ですが、ＰＲグッズなどの備品調達とともに、学生さんを含む主催者側のスタッフによる声かけなどが適切に行われていたことで、参加の場づくりが可能になったと思います。
・屋外でのＷＳという条件のなか、現場の状況や参加者の心情などを熟知している学生さんを含む主催者側スタッフによるロジなどの準備が充分に行われたことで、強い日差しや強風のにもかかわらず、当初の予定どおりＷＳ開始後は参加者との対話が可能な環境が確保されたと思います。
・今後の取組として、ＷＳでの参加者どうしの対話を促進したり、ＷＳ途中での新たな参加者を募ったりといった、参加者の参加度の向上を追求するとすれば、「何かやっている感」「楽しそう感」を演出するために、さらに工夫があってもよいかもしれません。

【田原敬一郎】
・マナーは、価値観の多様性を反映して、違和感や嫌悪感を普段感じていてもなかなかそれを表明する機会もなく、今回のワークショップは参加者にとってある種のカタルシスを得る場にもなったのではないか。
・自身の「常識」と他者のそれとの共通点や相違点を言語化することで、参加者にとっては多くの気づきや学びが得られたのではないかと思う。ルールが「物差し」として明文化可能であり、ある種の強制力を持つものであるのに対し、マナーは自然環境や他者に対する想像力、気配り

を前提とするものであり、自発的に守られるものである。今回のワークショップは、そうした想像力を拡張させ、共通の規範を形成するためのよい場になっていた。ワークショップという方法が、ルール化が難しいこうした問題を解決するための１つの有効な処方箋であることを示したのではないか。

- 一方、おしぼりや飲み物、粗品など、多様な参加者を得るための工夫が最大限なされていたが、ワークショップに参加していない釣り人も多く、参加者は「マナー」に関して比較的意識の高い層であったのではないかと推察される。その場その場に適した共通規範としてのマナーを形成し、普及させていくためには、こうしたワークショップを持続的に実施していくことで関心層をひろげていくことが一番の近道かもしれないが、対話の成果を印刷して釣り場にいる人に配布するなどの工夫も考えられる。
- 運営上の課題としては、家族で釣りに来ている人、特に小さな子ども連れの参加者が対話に集中できる環境作りがあげられる。今回、小学生も親と一緒に参加してもらったが、時間が経つにつれ子どもたちの集中力がとぎれてしまった。

【安藤仁香】

- 初心者子連れ、ベテラン、シニア海釣り初心者（川釣り経験者）、そこに振興会の方が加わり、視点の異なる人々で対話できたのが良かった。
- 振興会の存在や取組みを知ることができたのが一番の収穫だった、という声があったが、とても大きな成果ではないか。
- 最初はなかなか意見が出てこなかったが、参加者の特性に合わせて話を引き出すことで得られるものがあった。例えば、子連れの場合は子どもの注意力の問題、川釣り経験者には海と川との相違点や共通点からの気づきなどである。海と川の対比は、管理者やルール（漁協、遊漁券等）の違いなどがよくわかり、視点を広げることにつながったのではないか。
- 子どもがいたからこそ、将来世代へ想いを馳せるというまとめにつながった。一方で、集中力の問題があり、対話が難しい時もあった。ここは、改善の余地があるだろう。
- 今回使った付箋は粘着力が弱く、風の強い海辺での使用は要検討。

以上